

經濟理論の基本考察 (一)

— スミス國富論に基づく一試論 —

山 本 彰

目 次

- 一、前 書
- 二、本論の出發點
- 三、スミスの理論形成に於ける「自然」に就て
- 四、スミスの理論構造に於ける「勞働」に就て
- 五、結 び

一 前 書

私は今年の春四月から大學三年の英書講讀を受け持ち、本經濟學部古典研究會の編集になるアダム・スミスの『國富論』をテキストにして、今日約半才、其が内容の咀嚼に努めて來た。

此の場合、アダム・スミスの『國富論』から何を採り上げ、何を得可きかと云う事は、我々のグループに常に附纏う重要問題であつた。

本機會に本誌を借りて、多少とも私の志向して來た點を明らかにし、讀者諸氏の御批判、御指導、尙一層、御鞭達を仰ぐ資と致し度い。

二 本論の出發點

先ず、使用致しましたテキストは、價值論古典經濟叢書一 VALUE THEORIES CLASSICAL ECONOMICS SERIES I と云う表題の下に、『國富論』の Introduction 並に Book I の前七章(その内、第三章、第四章、第五章に於て、頁數の都合上、若干の箇所が省略されて居る)を内容として居る。此の場合、『國富論』中の此文の部分を探り上げて、論文を形成する事は輕率を免れない事が考えられる。此に就ては、飽く迄學生諸君との研究を基盤として問題とする事を、本論の基調となすが故に、『國富論』の此以外の箇所からの討論は今回に於ては一應差控えて尋ねて見度いと考えるものである。

而も、此の Introduction 並に Book I の前七章は『國富論』の中でも、理論中の理論として、土台を成す重要な部分とされる。此に就ての可能なる限りの綿密な研究は、延いて經濟理論を理解する上の根柢を確立する意味に於て必要であらう。

そして、此の事に於て、私達が進めた研究の方向の、或は VALUE THEORIES と云う表題を附して編集された本テキストの意圖から外れて居る事があるかも知れない。若しそうならば、私自身同志社の一員として誠に此のテキストに對して暴擧を爲した事になるのであつて、此の點、深く御詫びを申し上げなければならぬ。併し乍ら、中西教授が序文に於て、「所謂近代經濟學の研究を志す前提として、一應古典學派の經濟學一般を、修

得するの必要なるは、自明となすべきで、……」と述べて居られるので、結果に於て、あながち其の主旨から外れた事にはならないと考える。

研究の出発點として、此のテキストに収録されて居る『國富論』の内容理解のため、其の骨筋を明らかにして置く事は必要であろう。

- 一、國富は國民の年々消費する生活必需品並に便宜品の一切である。
 - 二、國富を増大させる重要な要素は労働の生産力である。
 - 三、労働の生産力を最も高める形態は分業の組織である。
 - 四、此の分業を惹き起す原理は人間の交換性同である。
 - 五、分業・交換の發達は市場の大きさに依つて影響を受ける。
 - 六、交換を圓滑ならしめる媒介用具として貨幣の出現がある。
 - 七、財貨の交換價値の眞實の尺度は労働である。
 - 八、財貨の實質價格を構成するものは利潤、賃銀、地代である。
 - 九、財貨の市場價格は常に財貨の自然價格に一致する傾向を有つ。
- 茲に私はスミスの理論が、第一に、スミスの生きた社會の經濟分析を行うに、其れ以前の社會の經濟狀態との對比に於て展開されて居り、第二に、労働なる要素を以て其の重要な理論分析の用具として居る、事に強く注意を惹かれた。以下此の二つを軸として考察を進め度いと考える。

三 スミスの理論形成に於ける「自然」に就て

スミスは其の冒頭に於て、國富を規定して、國民が年々消費する生活の必需品並に便宜品の一切であるとなし、此を富裕ならしめる要素は勞働の生産力であるとする。スミスは其の理論の展開に於て、此の勞働の生産力の自然的向上の原因を明かにし、斯くて形成される社會に於て、富裕が一般に行互る次第を明かにせんとする。勞働の生産力の向上をめぐつて特徴付けられる社會の様相は、人間の社會生活の「自然」發展と結び付く姿として説明が與えられる。問題の提起に於て、スミスは斯く述べる。狩獵民や漁撈民の野蠻國民の間では、働ける者は凡て多かれ少かれ、有益な勞働に従事し、出來る限り良く、彼自身や老者や幼者や病身で狩獵や漁撈に行けない者の爲に、生活の必需品や便宜品を供給しようと努めて居る。併し、彼等は慘めにも貧しいので、單に此の經濟的缺乏の爲に、往々にして其の家族や種族の幼者・老者・長病で惱める者達を直接殺害したり、遺棄して餓死せしめたり、野獸の餌食に供したりする必要に迫られる。然るに、文明にして繁華な國民の間では、非常に多くの者が全然勞働しないけれども、其の中には比較的大部分の勤勞者の消費よりも十倍、屢々百倍もの勞働の生産物を消費する者が多く存する。其でも、社會の全勞働の生産物が非常に大きいから、凡ての者は豊富に滿されて、最下層にして最貧窮に屬する職工すら、質素にして勤勉であれば、どの野蠻人が得るよりも大きな生活の必需品並に便宜品の分前を享受する。此の人間の生活を豊かならしめる要素の研究に於て、尋ね且つ把握すべき問題は、勞働の生産力の改善の原因と、其が「自然に」社會の夫々の階級並に地位の人々の間に分配される秩序とであるが、そこに明かにされる内容は、他ならぬ人間が社會生活に於て「自然」と形成し、富裕を齎して來た要

素である。そして此の要素は一般に敷衍する事が可能であり、富裕な社會を形成する原理であり、將來の發展も亦約束される底のものである。

では、スミス理論の展開に於て、此の「自然」として採り上げられて居る要素は何か。暫くスミス理論を忠實に跡付ける事に依つて、此の内容を明かにする事に努めて見度い。スミスは年々の勞働こそ國富を齎す資源であるとして、其の理論の對象を勞働の生産力の向上に位置付け、以て國の貧富の内容を解明せんとするものである。従つて茲に明かにせんとする「自然」の要素も亦、決して次節に於て明かにせんとする「勞働」の要素とかけ離れたものではない。スミス「理論」の自然の要素が其の「勞働」の要素と密接に結合し一致して展開されて居る事は、其の特徴である。

國民が年々消費する生活の必需品並に便宜品の一切は常に其の國民の年々の勞働の直接生産物であるか、此の生産物で以て他國民から購入されたものであるかの何れから成る。此が其を消費する國民の數に比して一層大なる割合を持つか一層小なる割合を持つかに依り、國民は其の必要とする一切の必需品並に便宜品を一層良く満たされるか、或は一層悪く満たされるかの何れかとなる。此の比率は各國民に於て、各國民の勞働が一般に用いられる所の熟練・技巧・判斷と、有益勞働に従事する者の數と有益勞働に従事しない者の數との割合と云う二つの異なる事情に依つて規整される。此の中、國富の大小を一層強く規整するものは前者である。斯くてスミスは考察の對象を主として前者に於て進める。

此の問題とされる勞働の生産力の最大の改善と、此の勞働を指導し且つ此に適用される熟練・技巧・判斷の大部分とは分業の結果であつたと考える。此の立論の證明の爲に先ず、人が容易に理解する留針製造業の實態を例

示す。分業は製造業に於て最も顯著に且つ自然に労働の生産力の向上を發揮する。其に就て三種の事情が考えられる。一は職工の技巧の増進であり、二は時間の節約であり、三は仕事を容易ならしめ簡略にし、一人をして多數の仕事爲さしめ得る非常に多くの機械の發明である。此等は皆分業の結果自然に齎される利益に他ならぬ。斯かる製造業に存する特性はスミス理論の展開の基盤である。どの一切の技業・製造業に於ても、分業が採用される場合には、此の留針製造業の場合に類似する。夫々の職業並に業務の相互分離は此の労働の生産力の向上と云う利益の結果起つた。此の分離は一般に最高度の勤勉と改良とを享受する國に於て最も完全に行われる。

農業國に於ては、其の仕事が季節に支配される事大なるを以て、分業が不可能である。従つて労働の生産力の改善行われず、今日依然たる貧國として存在する。富裕國に於ては、製造業に於て労働の生産力を大いに改善し得、多量の良品、安價な製品を市場に供給する。貧國と農業、富國と製造業の關係は注目に値する。社會の進歩に於て、哲學・思索も他の職業と同様に、或る特別の市民階級の主要な或は唯一の職業・業務と成り、數多の各部門に細分化する。其等にも技巧の増進・時間の節約が行われて、多大の成果が擧げられる。まこと分業の結果、一切の異なる技術に依る生産物の大いなる増加は、良く統治された社會に於て、最下層の人民に逆行互る一般の富裕を齎す。各職工は自己の必要とする以上に、賣捌く事の出来る大量の自己の製品を有する。一般的豊富を社會の全階層に行互らしめるものは此等の相互交換である。

本來人間性に存する交換性向は斯かる大きな利益を得る分業を惹起する。人は、其の經濟生活を營むに必要な相互の援助と協同とに就て、其の主要な起動力を人の有つ自愛心に基かしめる。自己の必要を滿たすに相手の利益を示す、或は自己の利益に於て他人の必要を滿す、此の具體的關係は交換に於て現われる。狩獵者の一種族に於

て、或る特別の人が他の人よりも一層容易且つ巧妙に弓矢を作る場合、彼が仲間と屢々其等を鳥獸の肉と交換したとすれば、遂には自ら原野に赴いて鳥獸を捉えるより、交換に依る方が自己にとつて多く利益になる事を知る。交換は本來斯かる契機に由來した。茲に彼は弓矢の製作を以て自己の主要な仕事とし、一種の武具製造人となる。同様の契機から、大工、鍛冶屋、眞鍮細工師、獸皮の鞣し工或は裝飾師が現われる。分業發達の基盤は自己の勞働の生産物の剩餘部分を確實に他人の勞働の生産物の剩餘部分と交換し得る事に在つた。人間間の自然的才能の差異は職業に依つて區別付けられる程其程大なるものではない。人の全く異なる天稟は多くの場合、分業の結果發生した。學者と普通の街の運搬人とに於ける如く、其の大きな性格の差異は習慣・風習・教育に依つて作られる事が大きい。併し乍ら、取引し交換し交易する性向がなければ、人間に於て夫々の職業を持ち、著しい才幹の相違を發揮すると云う事は有り得なかつた。而も此の異なる才分の發揮が人間に於ては相互に利益と成る。夫々の才幹に依る夫々の生産物は取引し交換し一般的性向に依つて、謂わば共通の資産と成る。分業は他人の才幹に依る生産物の如何なる部分が必要としようとも、之を購う事を可能ならしめる。

分業の此の一般的富裕を齎す程度は、交換の力の程度、別言すれば市場の大きさに依つて制限を受ける。市場が極めて小さいと、自己の勞働生産物の消費して尙剩る部分を他人の其と交換する能力が無いから、如何なる人も一つの仕事に一身を献げる刺戟を持つ事が出来ない。此の意味で、分業は元來海岸及び船の航行可能な大河川の沿岸から發達した。此の地域の市場は海を通じて全世界に解放される。交換能力は最大限に發揮が可能である。スミスの説く交通經濟論は次の如き内容を持つ。二地間同一量の財貨を輸送するに就て、陸運に於ては水運より費用高からざるを得ない。陸運に依る場合は水運に依る場合よりも取引量に於て小なる程度に制限される。

相互の産業に給する刺激亦小さからざるを得ない。國の内陸地方の市場の程度は、其を取巻く地方の豊富性と人口稠密度とに常に長期間比例しなければならず、其の結果、常に長期間其の地方の進歩は其を取巻く地方の進歩に劣らなければならぬ。

分業が確立すると、人が自身の労働の生産物に依つて満し得るのは、其の必要とするもの、極く小部分に過ぎなくなる。彼は自己の消費を超え、其の労働生産物の剩餘部分と、彼が必要とする他人の労働生産物の剩餘部分との交換に依つて、其の遙かに大きな部分を滿す。社會的には、其は所謂商業社會を形成する事と成る。併し、分業が最初起り始めた時、此の交換能力は屢々其の作用に於て全く大いに障碍を受け、紛糾を來した事が考えられる。或る一定の財貨に就き、一人は自ら必要とするよりも多くを有し、今一人は、少く持つとする。此の時、前者は此の過多の一部を喜んで後者に賣るであらうし、後者は喜んで其を前者から買うであらう。併し、偶々此の後者に前者の必要とする物を持合せて居ないと云う場合がある。斯かる事態の不便を避ける爲、分業が初めて確立された後に於て、思慮ある人は、交換に於て恐らく拒否する者は少いと想像される様な何らかの財一定量を何時も持合せる事に努めた。多くの異なる財貨が此の爲に續々と考え付かれ、用いられた。家畜・鹽・砂糖・貝・煙草等々。斯かる経緯が貨幣の起源を成す。纏て斯かる財の中から、金屬が貨幣として選ばれる。金屬はどの他の財貨にも劣らず損失少く保持されるのみならず、持ちの良さに於ては他の如何なる財貨にも優つて居る。其上、必要に應じて一樣に何の損失も無く、多數の部分に分割し得、又溶解に依つて容易に再結合し得る。未開の状態に於ては、金屬は何の刻印も鑄造も無く、粗棒に於て使用されたから、秤量と分析に就き全く多量の困難・不便を伴つた。比較的粗惡な金屬を使用して居る場合は秤量に於て其程精密である事を要しない。だが貧者の財

の賣買の爲に、例えば一フアーシングの目方を計らねばならぬと云う事は極度に面倒な事であつた。分析の作業は一層困難で一層單調である。金屬の一部が坩堝の中で適當な溶解劑に依つて充分に溶解するのでなければ、正確を免れない。而も鑄貨の制度以前に於ては、此の單調にして困難な作業を經るのでなければ、人々は常に最もひどい詐欺と瞞着とを蒙らねばならなかつた。斯かる弊害の豫防と、交換の容易と、凡ゆる種類の産業・商業の促進の爲に、改善進歩せる國に於て、財貨の購入に用いる特定の金屬の一定量に、公の刻印が附される事と成る。茲に鑄貨の起源があり、造幣局と呼ばれる役所の起源がある。併し、此の種の通用する金屬に附された公印の最初のものは金屬の品質乃至純度を確定しようとするもので、尙其の重さを正確に秤する事の不便と困難とが附纏つた。茲に、進んで刻印が完全に個片の兩側面を蔽い、時には其の縁をも蔽う、鑄貨の制度を惹起した。斯くて貨幣は現在に於ける如く秤量の困難なしに個數に依つて受取られる。貨幣は總ての文明國民に於ける商業の共通用具として、其の介在に依つて凡ゆる種類の財貨が賣買され、或は相互に交換される事と成る。問題は所謂財貨の相對價值乃至交換價值の決定である。財貨と貨幣とを、或は財貨相互を交換する場合に、人々が「自然に」氣付く規則の研究である。此の部面に就ては節を更めて考察し度い。

所謂商業社會の交換價值決定に就て、分析の用具に價值の實體たる「勞働」を以てするが、そこに蓋かれる社會は構成する各人の交換性向を媒介として自律し發展する。従つて交換價值をめぐつて展開される理論も、以上のスミスの説述に意味される「自然」を其儘繼承して眺められる可きものである。唯、本論に於ては、商業社會の交換價值決定の原理を「自然」を焦點として眺めず、其は其として重要に支配して存在する事を充分意識しつゝ、改めて今迄「勞働」こそ國富の資源であるとして、此を増大させる要素を明かにした内容を其儘繼承するも

のとしての「勞働」を焦點に考察して見ようとするものである。

四 スミスの理論構造に於ける「勞働」に就て

本節では主としてスミスの理論を彼の「勞働」なる部面から考察を進めて見度いと考える。以て、富形成の基盤たる「勞働」が、スミスに於ける現實の社會の市場價值決定を解明する理論の基盤として特徴付けられて居る所を明かにし度いと考える。併し乍ら、スミスの「勞働」に依つて展開される理論は終始一貫「自然」に支配された「勞働」として展開されて居るのであつて、決して二者別々に考えられるものではない。此は再度繰返すがスミス理論の特色として把握出来るものである。

スミスは國富の増進を以て理論展開の主目標と爲し、其の根柢をなすものは「勞働」の生産力の増進であるとした。「勞働」の生産力の増進は諸産業の中で、分業の最も完全に行われる製造業に於て最も顯著に發揮される。併し、分業の發達は元來、人の交換性向に依存する。此の交換能力に制限を與えるものは市場の範圍である。従つて、一國の持つ市場の大いさ、此が分業の發達程度を支配し、延いて國民の貧富を左右する。各人の夫々の生産量大いに増加して、相互交換に依存する生活の度合の高まるにつれ、此を圓滑ならしめ助長する貨幣が進歩した。斯くて社會は所謂商業社會を形成する事と成るが、問題は市場に現われる財の交換價値の理論である。

交換・分業の確立した後には、人は其の富たる生活の必需品・便宜品並に娛樂品の中、遙かに大きな部分を他人の勞働から得る。彼の貧富は此の購入し支配し得る勞働量に依つて定まる。彼が他財と交換し度いと思ふ財の價値は彼をして購入し或は支配し得せしめる勞働量に等しい。「勞働」は一切の財貨の交換價値の眞實の尺

度である。又、如何なる物でも、其を獲得して居て、其を賣捌き度い或は其を他物と交換し度いと思ふ人にとつて、現實に價値となるものは、其が其の人自身に持ち得、そして他人に課し得る骨折勞苦である。財を獲得するに就ての骨折勞苦は凡ゆる財貨の眞實價格を形成する。現實に於ける貨幣乃至財貨の交換は本來斯かる原理に則つて等價が成立する。併し實際行われる貨幣乃至財貨の交換に於ては通常、價値は勞働に依つて評價されない。投下された異種の勞働量間の比率に就ては、費された時間と共に、耐えられた困難と用いられた工夫の度合が考慮されねばならぬが、此等は實際、生産物の交換に於て、日常生活を行うに足る大まかな性質の斟酌を以て、市場の取引折衝に依り、調整される。又現實に於て、各財貨は勞働とよりも他財と交換され比較される場合の方が一層頻繁であるから、自然具體的に認知し得る或る特殊財の量を以て交換價値が評價される。物々交換が止んで貨幣が商業の共通用具と成ると、各財は一層頻繁に貨幣に依つて評價される。併し金銀は一切の他財と同様、其の價値を變化する。或る特別の量の金銀が購入或は支配し得る勞働量或は交換する他財の量は、常に斯かる交換の偶々行われる頃に知られる金銀の多産乃至寡産に依存する。貨幣は決して他財の正確な尺度ではない。之に反し、勞働者にとつては、等量の勞働は一切の時處に於て等しい價値を持つ。通常健康・體力・精神狀態に於て、通常の熟練と技巧とに於て常に勞働者は其の安樂・自由・幸福に就き、同一の分前を申し立てねばならぬ。勞働者は勞働の報酬として受取る財量の如何に拘らず、其の支拂う價格に於て同一でなければならぬ。勞働が時にはより、大量の財貨を購入し、時にはより、少量の財貨を購入するのは、商品の方に含有される實質價値の變化からである。勞働は財の眞實價格であり、貨幣は財の名目價格である。又、雇主も、勞働者にとつて常に等價値を有する等量の勞働が、時にはより、大きな價値を有し、時にはより、小さな價値を有すると感ずる。此とても實際は勞働

と交換に與えられる財の方がより安く、或はより高い。此の通俗的な意味に於て、勞働に實質價格と名目價格とを考へ得る。其の實質價格は其と交換に與えられる生活の必需品並に便宜品の量にあり、名目價格は貨幣量にある。勞働者の貧富、勞働者の報酬の良し悪しは勞働の實質價格に比例し、勞働の名目價格に比例しない。財貨と勞働に就き實質價格と名目價格とを區別する事は實際役立つ知識を得る。例えば永世地代を設定するとか極めて長い借地權を許す場合、此の地代が常に同一價值を有する事が意圖されるなら、其の地代を或る特別の金額に於て定めない事が、利益を考へて留保する家族にとつて重要である。此の場合、金銀の價值は二種の變化を免れぬ。一は同一單位の鑄貨に於て、時を異にして含まれる金銀の量が相違する事から生じ、二は時を異にして等量の金銀の價值が相違する事から生じる。此の二點が結合する時は、貨幣地代に於ける損失は尙一層大となる。時を隔つ場合は勞働者の生活資料たる等量の穀物が、等量の金銀或は何らか別の等量の財貨よりも、一層精密に勞働の實質價值を保有する。勞働者の生活資料即ち勞働の實質價格は、後退して居る社會よりも靜止して居る社會に於て、靜止して居る社會よりも富裕に進む社會に於て、一層大である。或る特別の時機に購入し得る生活資料の量に比例して、どの財貨も大小の勞働量を購入する。其故、穀物にて留保される地代は一定量の穀物が購入し得る勞働量の變化を免れぬのみであるが、何らか別の財にて留保される地代は、斯かる財貨一定量が購入し得る穀物量と斯かる量の穀物が購入し得る勞働量との二つの變化を免れぬ。併し年々に於ては穀物地代の實質價值は貨幣地代の實質價值より變化する事遙かに大きい。勞働の貨幣價格は穀物の貨幣價格と共に年々變動しない。穀物の平均乃至通常の價格に調節される。穀物の平均乃至通常の價格は銀の價值に依つて、市場に銀を供給する鑛山の多産乃至寡産に依つて、或は鑛山から市場まで銀を持ち來る爲に用いらねばならぬ勞働の、そして其の結

果、消費されねばならぬ穀物の、量に依つて規整される。銀の價值は時々世紀から世紀に亘つて大いに變化するが、年々大いに變化する事は滅多に無く、屢々半世紀或は全一世紀續けて同一であるか、全く同一に近い。其故、穀物の通常乃至平均價格は非常に長い期間中、同一或は全く殆ど同一を續け、社會が少くとも他の點で同一を繼續する限り、勞働の貨幣價格亦同一或は殆ど同一を維持する。此の間、穀物の一時的及び偶然的價格が一年に其の前年の價格の二倍となれば、穀物地代の名目價值のみならず、實質價值も前の價格に比して二倍となる。勞働の或は比較的大部分の他の財貨の量の二倍を支配する。勞働の貨幣價格及び其と共に此の全變動期間中同一を繼續する極めて多くの他の事物の貨幣價格の二倍を支配する。財貨の實質價值は、世紀から世紀に亘つては財と交換に與えられる銀の量に依つて評價する事が出来ないし、年々に於ては穀物の量に依つて評價する事が出来ない。勞働の量に依つて最大の正確さを以て、財貨の價值を世紀から世紀に亘つても、年々に於ても評價する事が出来る。勞働は唯一の正確な價值尺度、即ち凡ゆる時處に於て夫々の財貨の價值を支配し得る唯一の標準であるのみならず、唯一の普遍的尺度である。併し以上の如き實質價格と名目價格との差異は、人間生活に於て比較的共通な日常の取引たる賣買に於ては、全然役立つでない。同一の時處に於ては、一切の財貨の名目價格と實質價格とは正確に相互に比例して居る。貨幣は凡ゆる財貨の實質交換價值の正確な尺度である。併し、同一の時處に於てのみそうである。離れた處では財貨の實質價格と貨幣價格との間に何ら規則正しい比率が存在しない。二地間財貨を運び行く商人は、其の貨幣價格、即ち彼が一地で財を購入する際に手渡す銀量と、其後彼が別地で其の財を賣り交換に受取る銀量との差額に注目する。一地に於ては別地よりも、勞働並に生活の必需品と便宜品との双方を一層大量に支配出來ると云う、實質的な事情は商人にとつて重要でない。一切の賣買の慎重・不慎重を決

定付け、價格に關係ある日常生活の殆ど一切の實務を規整するのは財貨の名目價格或は貨幣價格であつて、實質價格より注意される事遙かに大きい。一國の貨幣は何らか特別の時處に於て、通貨の標準に一致して居ない程度、即ち通貨が當然含む可き純金乃至純銀の量を含まない程度に從つて、價值尺度の不正確さを決定する。磨損等に依り鑄貨に斯かる不規律の起る場合は、商品の價格は鑄貨が當然含まねばならぬ純金乃至純銀の量にではなく、經驗に依り平均して現實に含むと考えられる量に調整される。

斯くて物を獲得するに必要な勞働量間の割合が相互の交換の規則を決定すると云う論理を確立した。併し此の價值の實體を構成する要素に就ては、資本が蓄積され、土地の專有が行われる商業社會の實相把握の爲に、當然勞働者の賃銀のみならず、資本家の利潤並に地主の地代を包含せしめて考える事が必要となる。蓋し、資本の蓄積と土地の專有を基盤に成立する商業社會に於ては、資本家の利潤並に地主の地代は、夫々獨立の基盤に立つて生産に寄與し、生産された財貨の價格に夫々獨立の構成が認容せられるからである。資本が特殊の人の手に累積されると、財貨の生産は、彼等が資材の價格と勞働者の賃銀を前拂いし、自己の資本を冒險に堵す事に依つて行われ、彼等の資材の價格と勞働者の賃銀との前拂額以上の幾何かが利潤として與えられねばならぬ。又、利潤は斯く資本の價值に依つて規整せられると共に、小資本より寧ろ大資本を用いる關心に於て資本額の大きさに比例するものでなければならぬ。此の意味に於て、利潤は決して監査とか指揮とか云う或る特殊の勞働の賃銀の別名ではない。斯かる勞働は大事業に於ては或る主要な *point* に託され、其の賃銀は、設定に於て通常監査及び指揮に要する勞働並に技倆のみならず、彼に置かれる信用も顧慮されると云え、彼が取扱を監督する資本に何ら釣合のとれた比率を持たず、資本額の如何に拘らず、賃銀の需給法則に依つて一定の傾向を有する。土地亦私有財

産の意義に於て、生産物に對し地主の地代として要求する所と成る。社會の進歩、製造業の發達に於て、此等獨立の三要素は多かれ少かれ構成部分として一層大をなす財貨の價格部分に入り込む。例えば穀物の價格に於て、一部は地主の地代を、一部は勞働者の賃銀或は生計費及び穀物を生産する場合に用いられる役畜の維持費を、一部は農夫の利潤を償う。殘餘の部分として存在する農夫の資本の置換即ち役畜や其の他の農業用具の減耗磨損費の補ひには同じ三つの部分—例えば勞役馬に就ては、其を飼養する土地の地代、其の飼養や守番の勞働、地代並に賃銀を前拂する農業經營者の利潤—が入り込む。製造業の進歩に於て賃銀並に利潤に分解される價格部分は地代に分解される價格部分に比して大となる。利潤の數が増加するのみならず、後のどの利潤も先の利潤より大きくなる。最も進歩した社會に於ても、常に價格が二部分のみ—勞働の賃銀と資本の利潤—toに分解する財貨が二三あり、全く勞働に存する財貨があると云え、どの財貨の價格乃至交換價值も究極に於て、三部分の何れか或は全部に分解する。同様に、國の勞働の年總生産を構成する一切の財貨の價格乃至交換價值も合成して考える時、同一の三部分に分解する。スミスの論理は、斯くて財貨價格の構成部分の研究から社會の分配に立入り、交換社會の様相を明らかにする事と成る。價格を構成する三要素、勞働の賃銀、資本の利潤、土地の地代は三つの本來の收入源泉として、國の夫々の住民間に分配される。貨幣の利子は派生的收入であり、一切の租税及び其に基づく一切の收入、一切の給料、恩給、年金は究極に於て此の三つの本來の收入源泉の何れかから得られる。現實に於ては此等三種の收入が同一人に屬する時、往々共通の用語に於て相互に混同される。例えば耕作の費用を支拂つて自己の所有地の一部を農園とする人は地主の地代と農場經營者の利潤の双方の利益を得るが、其の全利得は利潤と稱される如く。價格を構成する賃銀・地代・利潤の實質價值は其等が購入し支配し得る勞働量に依つて測定さ

れる。労働は單に労働に分解する價格部分のみならず、地代や利潤に分解する價格部分の價值をも測定する。文明國に於ては、交換價值が労働のみから生ずる財貨は極く少數しか存在せず、利潤と地代とが大いに、遙かに大きな部分の財貨の交換價值に寄與するから、労働の年生産物は常に其の生産物を産出し作成し且つ市場に齎すに用いられる労働量よりも遙かに大量の労働を購入し或は支配するに足る。若し社會が年々に購入し得る全労働を雇うのであるとすれば、労働量が大いに毎年増加するのと同様に、後の各年の生産物は先の各年の生産物より莫大に大きな價值を有する事と成る。併し、勤勞者を維持するのに全年生産物を用いて居る國は無い。何處でも無用の者が其の大部分を消費する。年々其の二つの異なる階級の人々の間に分配される割合の相違に依つて、其の通常の或は平均の價值は年々増加するか、減少するか、或は同一状態を續けるかの何れかである。

斯くてスミスの理論は交換價值決定の理論に入る。彼に依れば此は「自然調和」の考えを背景にして樂觀的に樹立される。引續き此の内容を考察して見よう。土地の専有と資本の蓄積を基盤に交換される商業社會に於て、財の價格に労働の賃銀のみならず、資本の利潤並に土地の地代が構成要素として入り込む事は前段に於ける主要な研究の問題であり、明かにされた所であつた。本段に於ては此の基礎の上に、交換價值の決定される理論が示される事と成る。市場に現われる財貨の價格を構成する賃銀並に利潤に就ては、どの社會どの地方に於ても、夫々の異なる労働並に資本の使用に就き、一部は社會の貧富或は社會が進歩的・靜止的・衰微的の各状態何れに在るかに依り一部は各使用の特性に依つて、賃銀及び利潤の通常乃至平均の比率を考える事が出来る。同様に地代にも、一部は土地の置かれて居る社會の或は地方の一般的事情と、一部は土地の自然的或は改良された肥沃度とに依つて、通常乃至平均の比率を考える事が出来る。此等の通常率乃至平均率を賃銀利潤地代が普通行互つて居る時期

並に場所の自然率と呼ぶ。如何なる財貨の價格も其の自然率に従つて、財を産出し作成し市場に齎すに用いられる土地の地代と労働の賃銀と資本の利潤を支拂うに足る價格ならば、財は其時所謂自然價格で賣られる事と成る。財は其時正しく其の價值、財を實際に市場に齎す人の費用、で賣られる。即ち自然價格は前段で明かにされた労働の實質交換價值を正しく表明し、土地の専有と資本の蓄積が行われた後に於て、財の交換價值に利潤並に地代として労働の賃銀と共に構成して入り込む三要素の實質労働價值（労働費用）に依つて測定される。實質交換價值を表明する普通の用語に於て所謂財の原價は其を再び賣る人の利潤を含まないとして、財の販賣に通常の利潤率を認めないとすれば、彼に自由があり好むまゝに取引を變え得る場合に於て、彼は明かに損失者と成る。彼の利潤は彼の生活資料の正しく資源である。彼は商品を作成し市場に齎す間、職工に賃銀乃至其の生活資料を前拂いするのと同様に、一般に商品の販賣に依つて合理的に豫期される利潤に遠わしい自己の生活資料を前拂いする。商品が彼に此の利潤を齎すのでなければ、商品は實際斯かる部分の費用を償還しない。利潤を含む價格は必ずしも販賣者の商品を賣る最低價格でないけれども、恐らく相當期間賣られる最低價格である。實際の具體的な色々な事情が作用して、財が現實に賣られる價格は市場價格である。市場價格は自然價格より高いか低いか或は全く同一であるかの何れかである。スミスに於ては市場價格が不斷に自然價格に一致する傾向を有する事を明かにする事が理論展開の主要な骨子である。市場價格は現實に市場に持來る商品の量と、此の財の自然價格を喜んで支拂おうとする人の需要量との割合に依つて調節される。此の需要は財を市場に齎す事を有效ならしめるに足る需要である。従つて有效需要と呼ぶ。市場に齎される財量が此の財に對する有效需要の量に不足する時は、此の財を自然價格で支拂おうとする人全部の必要量を満す事が出來ぬ。彼等の中に斯くて不足するより寧ろ喜んでより

多くの價值を與えようとする者が現われ、彼等の間で競争が始まる。此の競争の熱度は不足の度の大きさ乃至競争者の富と放恣な奢侈に依つて定まる。均等の富と奢侈を有する競争者間では、同一の不足が一般に財の獲得を必要とする度合に依つて定まる。其に應じて市場價格は大きく或は小さく自然價格を格超えて上昇する。斯かる場合には價格の構成部分の何れかが自然率を超えて上昇する。地代であれば、地主の關心は當然彼等を刺戟して此の財の産出の爲により、多くの土地を用意せしめる。貸銀乃至利潤であれば、労働者乃至販賣者の關心は彼等を刺戟して財の生産と市場への供給の爲により、多くの労働或は資本を使用させる。斯くて市場に齎される量は早晩有效需要量を滿す程度と成り、價格の構成部分は自然率に下り、總價格は自然價格に下る。市場に齎される財量が有效需要量を超える場合は、必ずしも財の自然價格を支拂おうとする人達に賣られない。より、少く支拂おうとする人達に賣られねばならぬ部分が存し、彼等が其に對して與える低價格は全體の價格を下げる。市場價格は、超過の大きさが販賣者の競争を増す程度或は直接其の財から免れる事が販賣者にとつて重要である程度に従つて、自然價格以下に或は大きく或は小さく下る。斯かる場合には、其の價格の構成部分の何れかが其の自然率以下で支拂われる。地代であれば、地主の關心は直接彼を刺戟して其の土地の一部を引取らしめる。貸銀乃至利潤であれば、労働者乃至雇傭者の關心が彼等を刺戟して労働乃至資本の一部を其の使用から撤去せしめる。斯くて市場に齎される量は早晩有效需要量を滿すに足る状態と成る。價格の構成部分は凡て自然率に上昇し、總價格は自然價格に上昇する。市場に齎される量が丁度有效需要の量を滿すに足り其丈の事に過ぎぬ場合は、市場價格は當然正確に或は判斷し得ると殆ど同程度に精密に自然價格と同一となる。持合せの全量は此の價格で賣捌かれ、此以上の價格では賣捌かれ得ない。販賣者の競争は彼等全部をして此の價格を受諾する事を餘儀なくするが、より

低い價格を受諾せねばならぬ事はない。財貨の量が決して有效需要の量を超過しない事は財を市場に齎す爲に土地勞働資本を用いる人々一切の關心事であり、財貨の量が決して有效需要の量に不足しない事は其以外の人々一切の關心事である。此の兩作用が結局財貨の量を有效需要の量に適合せしめる。自然價格は謂わば一切の財の價格が絶えず自然に惹き附けられる中心價格である。産業には同一量の勤勞に於て年を異にするに依り全く異なる量の財を生産するものと、常に同一量或は全く殆ど同一量の財を生産するものがある。後者の種類(例えば、リンネル・羅紗)の市場價格は有效需要の變化と共に變動するに過ぎないが、前者の種類(例えば、穀物・葡萄酒)の市場價格は單に有效需要の變化のみならず、其の産額の遙かに大きく且つ頻々たる變化と共に變動する。或る財の市場價格の偶然的變動は主として其の價格の賃銀と利潤とに分解する部分にふりかゝる。地代に分解する部分は其の變動の影響を比較的少ししか受けない。斯かる變動の賃銀乃至利潤の價值並に比率の双方に影響するのは、市場が偶々財貨に就て或は勞働に就て、過剩資本化されるか過少資本化されるかに依る。更に、種々の偶發的事件・自然的原因・特別の政策上の規定が財貨の市場價格を自然價格から乖離せしめる事に就て、若干考察を加えて居る。

以上スミスが商業社會の交換價值に就て解明した所は、交換價值を規定する眞實の價值尺度は勞働でなければならぬ。財を獲得するに就て投下された骨折勞苦、此が交換社會に於て財を購入し支配する勞働との對比に於て交換が成立する原理である。普通現實に於て貨幣が價值尺度となるも、其は内に含む勞働價值を基盤にして始めて實體が把握される。日々の取引に於ては貨幣價值は安定したものであり、其に依る事が可能であると云うに過ぎぬ。併し商業社會に於ては、實質交換價值を構成する要素は勞働丈ではない。資本の私有と土地の専有が既に認められ、此故に夫々獨立の要素として資本の利潤・土地の地代が價格の部分を構成する。此の三つの價格構成

要素は又本來三つの収入源泉を形成する。勞働の年生産物の剩餘部分の利潤と地代に相當する價值額の中、其等がより、大量に生産的な勞働面に投下されるとすれば、そこに擴大再生産が可能であり、生産的な勞働面に支出されるも、充當されるのは現年生産物を維持するに必要な額で、殘部は消費されるとすれば、生産は同一状態を續ける。其等が生産的な勞働面に支出される事より、少く、現年生産物の維持に必要な價值額にも入り込んで、より、大量に消費面に用いられる場合は、生産は縮小再生産に向う事と成る。斯くて利潤賃銀地代の三構成を内に含みつゝ、夫々の社會、夫々の地方の特殊性の下に、夫々の要素の勞働價值の通常率乃至平均率を以て現われる價格を自然價格と名付け、此が現實の市場價格を常に惹き附ける中心價格として理論を完成した。

五 結 び

以上二節に亘り記した所は、スミスの理論を出来る限り彼の説述に即應して、把握し明確にする事に努めて來たものであつた。スミスの理論の前半を「自然」なる概念の下に置き、後半を「勞働」なる理論分析の用具の下に置いたのは、スミスの理論に於て此の二つが明確に區分されて居るといふ理由からではなくて——寧ろスミスの理論に於ては「自然」と「勞働」は全體に一貫して流れて居る特徴である——唯、前半に於ては交換性同——分業——市場——貨幣と云う條件が自然發展的に備わる所に、問題の「勞働」なる要素の自然發展の基盤が與えられ、牽いて國富が擴大すると云う原理を明確にする意味で、「自然」なる概念の下に考察の焦點たらしめたのであり、又、後半に於ては、分業・貨幣が確立したスミスの時代の、商業社會の交換價值解明の爲に、「勞働」なる分析用具を基盤に置き、配するに「自然調和」を以て終つた、謂わば樂觀的理論確立の内容を明かにする爲に、特にスミス

の「勞働」に重點を置いて考察するのが妥當であると云う見解に據るものであつた。

後の純粹經濟學發展の基盤をなすと考える、スミスの此の著が「國富の増進」を主要なる眼目として、其の展開の出發點として居る事に就ては、スミスの時代的背景を考察し研究する必要があるが、(アダム・スミスと云う一人間をめぐつて、其の個人の主義思想確立の経緯を尋ねるために、其の個人を特徴付ける面——高邁な性格、厚誼な友情、ひたむきな學究心——と、其の個人に影響を及ぼしたと考えられる外的要因——グラスゴーの發展、自然主義哲學、重商主義思想、重農學派の思想——とが、延いてスミスの實際面に通曉し、高遠深淵な理論の形成に資した關係内容を明らかにする事は其の理論理解の上に重要であるが、此に就ては私は一應(註)に掲げたW・R・スコット氏の紹介並に意見に據つて居り、本文では其の傳説を行わない事とする。)今日依然として理論經濟學の基盤を構成し、其の爲に絶えずスミスの理論が回顧されると云う事に於て注目し値する。而して、スミスに於ては「國富の増進」を主題とする事に依つて、理論を確立したのみならず、政策の據り所も明示する事となつた。スミス理論形成の觀念に於て、「自然思想——自由放任——自然調和」は製造業と結び付き、具體的に明確に資本主義體制確立を進展する事と成る。茲に、スミスの採り上げた「勞働」なる要素も、未だ資本主義體制の確立されざる時期に於ける、謂わば「國民一般」と合致し、資本家・地主階級と共に調和して富裕になる事が約束されて居る。スミスが國富増進の源泉として勞働の生産力を最高度に發揚し、基幹をなすとして捉える製造業に就て之亦彼の時代的背景を考察して見る必要があるが、爾後急速に發展する、機械文明に依つて高度化する資本主義社會の經濟現象の法則を其に於て既に確立し、益々複雑化する機構を未熟幼稚の内に於て明瞭ならしめ、後人をして常に資本主義機構理解の爲の基盤を與える役目を果して居る事に、スミスの偉大を物語るものであり、

今日依然として、『國富論』が古典として正しく讀返される所以を爲すと考ふる。又、「勞働」なる要素が採り上げられる事に依つて、生産の擔い手が明かにされ、生産—分配—消費の三面に立脚する理論經濟學に於て、先ず生産面から樹立される事とも成つた。併し、スミスは「勞働」なる要素を採り上げる事に依つて、今日明瞭に一階級を構成する「勞働者」を特に問題としたのではない。「勞働者」は「國民一般」の一部分として包攝せしめられ、彼が「勞働」なる要素を採り上げる事に依つて、寧ろはつきり國力の擔い手たらしめたのは産業資本家であつた。其に依つて『國富論』は元來が先進國として世界に於て既に優位に立つ富裕の國の更に富を増す理論とも云える。其はともあれ、スミスが「勞働」を理論の用具とした事は重大である。スミスに於ては、「自然調和」の裡に、不徹底な討究に終つた「勞働」をめぐる諸問題の研究は資本主義の進展と共に、はつきりと「勞働階級」として問題化する。資本主義經濟機構に於て、分配面に於ける利潤乃至地代の含有する實質勞働價値のより、生産的な部面に活用する事に依る直接の利益は資本家階級に齎され、正しく生産の機能を荷う勞働の提供者に、其の投下勞働價値通りの報酬が與えられない。茲に由因する、購買力の減少乃至有效需要の減退、牽いて豐饒の貧困を醸し出す事態は、資本主義經濟の正しく「自然」的發展に於て、必然的に今日把握される理論の内容であるが、勿論スミスに於て採り上げられて居ない、今日吾々の重要な關心事である。スミスが經濟學の主要課題を「國富の増進」に在りとし、國富を増進せしめる起動力として「勞働」の生産力の向上に着目した事、而して以て、此の「勞働」の生産力を最も高度に發揚するものは製造業の部面に於ける分業であるとし、此が基盤と成つて社會の文明の開發に於ても分業に依るより、多大の成果を獲得する事が可能と成るのみならず、進んで助長促進の傾向をも齎すものであるとする事、此等に依つて國富を形成する豊富な剩餘生産物の社會に充滿する事に

就き、交換性向—分業—貨幣の要素の總べて「自然」發展なる概念の下に統轄せられ、内容の論述せられる事の基礎には、製造業に於て活用される豊富なる資源の存在と廣大なる市場の存在とが前提されるが、此がスミスに於ては富國の海上を支配し、交通に於て製造業の發達に有利に資する海運力を驅使して、自由に世界に雄飛する諸個人の活動の「自然」發展的なものとして對象とせられ、分業の「自然」發展に就て、空間的意味に於ける市場の存在が缺く可からざる要件とせられると共に、商業社會の理論構造に於けるスミスの「勞働」との關係に就て、購買力の増大乃至商業社會を成立せしめる生産（供給）—消費（需要）の對應部面の消費（需要）部面を構成する有效需要の不斷の維持も「自然」發展的に齎されるものとして取扱われる。スミスの立論は學說史的に見て、理論經濟學を成立せしめる上に大きな功績を擧げた。此の面から確かに我々の學ぶ可き點が實に豊に存する事を銘記するが、他面吾々が新たに、現實の面に即應して理論を討究する時、又多々の問題に出會わす。スミスの「自然」として採り上げた諸要素が、時代の進展と共に、同じく「自然」に内容・性質を異にして現われる事は、我々の極めて注意せねばならぬ所である。スミスに於て「自然」發展の裡に樂觀的に總て眺められて居る内容は、我々に於ては咀嚼吟味の要がある。市場並に有效需要の問題は資本主義經濟其れ自體の「自然」發展の裡に、現世代の者に重苦しくのしかゝつて居る。其の解決に就ては究極の所、「勞働」を提供する者—資本主義社會に於て一般大衆として顯出する—の購買力を増大する事にのみあるが、今日「國富論」の理論討究から我々の把握出来る所である。今日の段階に於ては、どの資本主義も一國のみの領域を以てしては其の維持が不可能の段階に來て居り、文明の進歩に依る世界の距離並に時間の短縮は各國を結び付けて世界を一にする方向に進んで居る事が大局的に看取されるが、今日明瞭に成つた斯かる論理的歸結は、いみじくもスミスが理論に於て「自然」とし

て採り上げた要素と、高度に發達した交換社會の原理把握の用具としてスミスが採り上げた「勞働」なる概念とが、甚大なる影響を以て今日開明の光を大量に投げ掛けて居ると言う事が出来る。究極に於て、今日最大の問題たる有效需要乃至購買力の増進は—スミスに於ては市場の擴大と云う空間的擴がり—to 國富の増進の最高度の發揮を直接考えて居るのであるが、其も延いては豊富低廉な資源と廣大な販路の獲得の底に生産された財に對する有效需要が常に横つて存在して居る事を前提するものである—正しく具體的には一般大衆として現われる「勞働」の提供者に齎される事に依つてのみ可能である。此事はスミスの理論を考察する事に依つて今日推察出来る問題である。又、スミスの理論に於て商業社會の交換原理を明らかにするに、「勞働」こそ其の價値の眞實の尺度として捉え、配するに財の生産に於て投下された勞働量と、生産された此の財貨の市場に於て獲得支配する勞働量とを擧げ、交換に於ては原理的に兩價値が等價に於て一致成立すると述べ、然る後、或は投下された勞働量を以て交換價値の眞實の尺度として理論を規定せんとし、或は金銀の量、穀物の量乃至生活資料に依つて、其等が支配する勞働量を以て交換價値の眞實の價値尺度たらしめんとする。投下勞働價値と支配勞働價値とは飽く迄資本主義社會の理論分析に於て明確に取扱われねばならぬ概念要素であるが、スミスの理論の展開に於ては其が未だ出來上つて居ない。而も終りには、樂觀的に一面的に極く短期の取引に於ては金銀の名目價値に依つて交換が行われるとし、現實の事象を尋ねる。スミスの『國富論』が世に出て程なく、リカアダーの理論がスミスの此の部面を突いて理論を一貫させ明確にして現われる。リカアダーは其の理論形成に於て、一財の支配する勞働價値概念と投下されたる勞働價値概念とを峻別し、投下勞働量を以て交換の眞實の價値尺度たらしめる。又、「勞働」と云う觀念に就てスミスは本來年生産物の價値の實體を成すと云う考えを採つた。併し乍ら、土地の專有と資本の

蓄積とが行われた以後の商品交換社會に於ては、商品の價値に就き、資本の提供者、土地の提供者、勞働の提供者と云う商品の生産に於て相異なる機能を果す者の夫々分前を要求する所と成り、商品の實質交換價値は賃銀・地代・利潤の三部分に分解する事と成る。スミスは此事から引續き、資本家の利潤、地主の地代、勞働者の賃銀は又商品の實質價値を構成する三つの要素であるとし、所謂 $V = p + r + w$ と $p + r + w = V$ の二式で表現される矛盾に陥つて居る。此れ尙スミスの支配勞働と投下勞働との觀念の曖昧さから出て居るものであるが、彼は此の價値の三構成から、資本家の利潤、地主の地代、勞働者の賃銀が分配面に於ける收入の本來の三源泉をも形成するとし、市場の交換分析に當つて、所謂生産費説を展開し、需要供給説を展開する事とも成つた。又、スミスの扱つた「勞働」概念は質的な具體的有用勞働を離れるものではなかつた。此に就ては理論の發展過程上、勞働價値説の推進の意味に於て、商品生産に必要な社會的平均的勞働概念が打立てられて來る。一般的な抽象的人間勞働に嚴密に換算する問題が終始附纏う。以上、總てスミスにまつる多多の問題をめぐり、スミス以後の理論の進展の研究は、私自身にとつて今後の課題である。スミスの理論は理論研究の前提であり、問題考察の出發點でもある。唯、「自然」と「勞働」、所謂自然要素と人間が構成し規定する社會要素、此の結び付きを捉える事が大切である事を何よりもスミスの理論から學び採らねばならぬ重要な事柄であると私は考へる。此は他ならぬスミスが所謂經濟學を成立した意味に於ける、其の内容と條件の討究をこそ重視する立場でなくてはならない。

(註) スミス研究に就て本論文のために直接參考とせる研究資料

Bohn's Standard Library, *The Wealth of Nations*, Introduction, by W. R. Scott
New Light on Adam Smith, by W. R. Scott, *The Economic Journal*, Sept. 1936.

經濟理論の基本考察（一）

（九四）

九四

現代經濟學辭典（岩波書店刊）

經濟學一般理論（中山伊知郎著 日本評論社版）

フイリボグイツチ 經濟原論（氣賀勸重解説）

國富論解説（世界大思想全集 青野季吉）